

コミュニケーションの発達に偏りのある 2 歳児の母親に対する  
アタッチメント：  
個々の子どもにとっての不安喚起要因に着目した探索的研究

堤 かおり（東京大学）

Attachment to caregivers of 2-year-old children with developmental  
communication problem:

An exploratory research focusing on each child's unique stressor

Kaori Tsutsumi

Author's Note

Kaori Tsutsumi is a PhD Student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

This study aimed to examine the essential quality of the attachment to the primary caregiver of 2-year-old children with communication problems, especially on the basis of Bowlby's attachment principal. For this purpose, we firstly examined the precise events which causes each child's anxiety, then we investigated if the child show attachment behavior when aroused their anxiety by the events. Also, we analyzed how each mother-child interaction influenced their attachment relationships. The result suggested that every child showed attachment behavior in their own crisis. However the time it took for the children to recover and the way how they do was depending on the case, especially on the details of the mother-child interaction.

*Keywords: attachment, children with communication problems, mother-child interaction*

キーワード：アタッチメント，コミュニケーションの課題を抱える子ども，母子相互作用

## コミュニケーションの発達に偏りのある 2 歳児の母親に対する アタッチメント：

個々の子どもにとっての不安喚起要因に着目した探索的研究

### 1 問題と目的

対人相互コミュニケーションの発達に問題を抱えている神経発達障害に自閉スペクトラム症 (ASD : Autism spectrum disorder) がある。ASD は社会的コミュニケーションの持続的な問題と、限定的・反復的な行動や興味によって特徴づけられ、その問題は社会適応に重大な問題をもたらすものであり、発達早期の段階で出現するとされている (DSM-5 : APA, 2013)。乳幼児期の ASD に見られる他者への傾性の低さや、よく泣く、自傷行為、強いこだわり等の行動は養育者を困惑させ (山本・楠本, 2007 ; 西村・高野, 2020), 親子関係構築を困難にする場合が多い (小林ら, 2002 ; 坂口・別府, 2007)。このような背景から、ASD 児とその養育者に対する有効な関係性構築支援の確立に関心が向けられている (尾崎, 2014)。

発達心理学において、親子の関係性構築の始まりはアタッチメント (Attachment : Bowlby, 1969) という概念を用いて検討される。Bowlby (1969) の定義によると、アタッチメント行動とは、「何らかの外的事象によって不安が喚起された時に」、「特定他者へ定位・発信する」行動を意味する。乳幼児は、自ら発信したアタッチメント行動に対して養育者が適切に反応しなだめてくれることで、不安を鎮め再び安心して外界の探索を開始することができる。こうした原初的な親子の相互関係を土台として発達とともに緩やかに形を変えながらも、ある程度一貫した親子の関係性が構築されていく。従って、親子の関係性構築支援を考える際には、乳幼児期

のアタッチメント形成の様相を明らかにすることが不可欠であるといえる。

ASD 児に関する研究においては、アタッチメント形成が可能であることが一貫して示されてきた (Capps et al., 1994; Willemssen-Swinkels et al., 2000)。一方で、安定型アタッチメントの割合やアタッチメント形成に寄与する要因に関しては、必ずしも一貫した結果が得られていない (Rutgers et al., 2004; Baker, 2010; van Ijzendoorn et al., 1999)。このような先行研究における問題点として、筆者は大きく以下の 2 点を挙げる。

1 つめは、方法論の問題である。ASD 児についての先行研究の多くは、SSP : Strange Situation Procedure (Ainsworth, 1978) という代表的なアタッチメント測定法を用いて行われてきた (Capps et al., 1994)。つまり、“母子分離によって不安を感じた”子どもが再会時に“母親にどのように近接し不安を鎮めることができるか”を測定することで対象児のアタッチメントの安定性を捉えようとしてきた。しかし、認知や情動の発達に特異性を持つ ASD 児においては、SSP の設定が必ずしも不安を喚起するとは限らない (伊藤, 2002)。また、不安定や無秩序と捉えられる行動が、思考や情動の切り替えの苦手さや回避的な行動傾向に由来する可能性も考えられる (山本・楠本, 2007)。ASD 児が何によって不安を感じどのように養育者を利用して安心を取り戻すかは個々の ASD 児によって様々である可能性が考えられ、SSP は ASD 児の Bowlby が元来提唱してきたアタッチメントを捉え切れていない可能性がある。

2つめは、先行研究は ASD 児のアタッチメントの質や形成に関わる要因について、集団としての傾向を明らかにしようとしてきたが一貫した結果が得られていない点である。一括りに ASD といっても、その症状は限定的ではなく類縁の病態が連続して広範にわたることが知られている (Wing, 1997)。また、環境との相互作用によりその状態像は変わり得るものである (千住, 2012)。アタッチメントは元来、二者間の相互作用の帰結として築かれる関係性に着目して捉えられるべき概念であることを鑑みると (遠藤, 2021)、個々の症状や養育者との相互作用の在り方によって、アタッチメントの質や形成過程は様々な様相を呈する可能性が考えられる。従って、ASD 児のアタッチメントの質や形成に関わる要因を明らかにするためには、個々の親子ペアの相互作用に着目し、個別の事例におけるアタッチメント形成過程を明らかにする必要がある。

以上より、筆者は本研究において Bowlby の本来の定義に立ち返り、[研究 1] 個々の対象児にとっての固有の具体的な不安喚起要因を明らかにすること、[研究 2] 研究 1 で明らかとなった各対象児の不安喚起場面において、対象児が養育者との関係性を通して安心を得て再び探索に出る姿 (Bowlby が定義したアタッチメント) が見られるかどうかを明らかにすること、[研究 3] それぞれの母子ペアの相互作用の在り方が、研究 2 で捉えたアタッチメント関係にどのような影響を及ぼしているかについて検討することを目的とした。

## 2 方法

### 2.1 対象者

本研究の対象者は、A 自治体の発達センター

を利用している 2 歳児男児 8 名とその母親であった。対象児のうち、母親による主訴と児の発達状況、医師、心理士の見解を踏まえ、知的障害がなく、特に対人コミュニケーションの発達に課題を有し、行動・活動・興味に限定的な様子が見られる 5 名を分析対象とした。分析対象児の中に ASD の確定診断を受けている者はいなかった。また、対象児が今後 ASD の確定診断を受ける可能性について、現時点において明言することはできない。しかし、近年 ASD がスペクトラムの概念として捉えられており、その状態像は多様性かつ可変性を有するものであるとされていることに鑑みると (千住, 2018)、現時点での対象児のアタッチメントの様相を明らかにすることは ASD のアタッチメント研究に寄与すると筆者は考える。

### 2.2 倫理的配慮

研究協力施設の施設長に研究の目的・方法・結果の利用について説明し、文書による承諾を得た。また、観察対象とするグループに参加する保護者全員に同様の説明を行い、研究参加は個人の自由意志によるものであること、いつでも同意の撤回を行うことができること等を説明し、全員から文書による承諾を得た。本研究は、筆者の所属大学の倫理審査の許可を得たものである (審査番号 21-16)。

### 2.3 観察場面

A 自治体の発達センター内で行われているグループ療育場面 (約 90 分) における母子の相互作用場面の自然観察を行った。1 グループにつき 4 組の母子と 4 名の支援者が参加していた。療育は各グループとも週 1 回、全 12 回行われ、そのうち各 3 回について観察を行った。観察者

は部屋の隅でビデオカメラを撮影しながら観察を行った。観察者のビデオカメラの他に定点カメラを1台設置し、室内全体の様子を記録した。観察記録は合計で約540分であった。

## 2.4 研究者と研究協力施設・研究対象者との関係性

筆者は、大学院生でありながら週2回非常勤心理士として研究協力施設に勤務している。観察対象となったグループ療育の関係スタッフとは良好な関係を築いており、療育の目的や設定、スケジュール、参加親子の基本情報等に関して日頃から十分に情報を共有していた。また、対象者である母親たちは協力施設に対し信頼感を持っていた。筆者のグループへの参入についても快諾して下さり、研究開始前から研究終了後まで好意的に関わって下さった。研究中はスタッフの協力もあり、ビデオの設置や観察者が動画撮影を行うことによる対象者への影響をできる限り小さくすることができた。

## 2.5 分析

対象者のグループ療育の参加状況や養育者の変更（最も主たる養育者は母であるが父が療育に同伴したなど）を考慮し、全参加者が同じ条件で参加した各グループ1回ずつ（90分）を分析の対象とした。分析の手順は以下のとおりであった。

① 不安喚起場面を取り出し、動画を逐語記録に変換し詳細に記述した。不安喚起場面の定義は、「ある事象をきっかけとした主体的な活動の停止・停滞が見られる」場面とした。具体的には次のような場面を取り上げた：[外在化行動] 進行中の活動を停止・停滞させるように動き回る・物を乱暴に扱う・大声を出す、[内在化

行動] 遊びをやめる、進行中の活動に逆行するようにその場を離れる・体の向きを変える、進行中のポジティブ感情（笑顔・明るい声）に逆行するようにネガティブ感情（笑顔や発声の消失・指をくわえる etc...）を示す。逐語記録は以下の5点について詳細に記述した。[1] 不安喚起前の子どもの行動と背景、[2] 不安喚起の契機となった状況、[3] 不安喚起時の子どもの行動、[4] 子どもの行動に対する養育者の行動、[5] その後の子どもの情動の変化。

② 不安喚起要因をカテゴリ化した後、各カテゴリについて全ての場面を抽出し、そのカテゴリ場面における不安喚起頻度を調べ、頻度が高いものを不安喚起要因とみなした。

③ 対象児の探索時における親子の相互作用について、動画を逐語記録に変換し詳細に記述した。特に、探索時の対象児の行動・母親に対する行動・発声・視線、母親の対象児に対する行動について具体的に記述した。

④ ③が①②で分析した対象児のアタッチメントに及ぼす影響について分析した。また、観察時間外に母親から聞き取った話の内容も分析の対象とした。

## 3 結果と考察

### 3.1 [研究1]

表1に各対象児の不安喚起要因を示す。対象児の不安喚起要因は様々であったが、『母親との距離が離れる』『Strangerの存在』『Strangerからの関わり』『新規の物・遊び』『物の状態変化』『遊びの失敗』『危険・痛み』『行動を制される』の大きく8つのカテゴリに分類された。

また、各カテゴリが出現する場面を全て抽出し不安喚起頻度を調べたところ、同じカテゴリ場面でも対象児の不安が喚起される場合と

表 1 対象児の不安喚起要因

不安喚起要因カテゴリー	c1		c2		c3		c4		c5	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
Mとの距離が離れる	8	0	1	0						
Strangerの存在										
進行方向にいる	4	4								
向かって来る	9	2 ※a								
Strangerからの関り										
児の関心に添わない・唐突	10	10	4	1 ※b						
児の関心に添ったサポート	0	21	1 ※c	31						
新規の物・遊び			6	0	5	1	1	0		
物の状態変化										
提示される			6	0						
自分の操作の結果			0	3						
遊びの失敗							3	0	3	0
危険・痛み					1	0			4	0
制される					1	0			3	0

※a 相手の意図がわかり行動を予測していた ※b M の膝に抱かれていたとき ※c 直前までいなかった人が手伝った

されない場合があった。例えば『Stranger の存在』に関しては、Stranger が「進行方向にいる」場合は不安喚起頻度は 50%にとどまったが、「向かって来る」場合の不安喚起頻度は約 82%であった。また、『Stranger からの関わり』に関しては、「対象児の関心に添わない関わりや唐突な関わり」の場合の不安喚起頻度は 56%であったのに対し、「児の関心に添ったサポート的な関わり」であった場合の不安喚起頻度は約 2%であった。さらに、『物の状態変化』に関しては、「提示される」場合には 100%不安が喚起された一方、「自分の操作の結果」であった場合には不安は喚起されなかった。これらの結果を総合して対象児の不安喚起要因を概観すると、対象児自身が見通しを持つことができない状況、能動的に関わることが難しい状況において不安が喚起されやすい可能性が考えられた。

また、対象児が見通しを持って能動的に関わることができず不安が喚起される状況は、一般的に想定される状況よりもかなり些細なことや意外なことである場合があった。例えば、『Stranger からの関わり』では、Stranger が好意

的に話しかける場面、「できた！」と言って拍手をする場面などがあった。『新規の物・遊び』では、室内の配置が以前と違っている場面、見たことはあるが初めて遊ぶ場面などがあった。『物の状態変化』としては、新聞紙をビリビリと破く様子を見る場面、『遊びの失敗』としては、積み上げていた積木が倒れそうになる場面等が抽出された。つまり、一般的には好意的な関わり方や、物理的な小さな変化、一般的に幼児が喜びそうな遊びであっても、対象児にとっては不安喚起要因となる場合があった。

### 3.2 [研究 2]

表 2 に、各対象児のアタッチメント行動の具体的エピソード例を示す。全ての対象児において、それぞれの不安喚起要因による不安喚起時に養育者に物理的に近接し養育者との相互作用を通して安全の感覚を回復する姿が見られた。しかし、対象児が安全の感覚を取り戻して再び探索を始めるまでの時間や様子はいつも同様ではなく、場面ごとに個別的であり状況依存的であった。

また、対象児がアタッチメント行動を示した場面は必ずしも母子分離場面とは限らず、前節で述べたような様々な場面があった。この結果は、SSPのような従来の手法を用いた測定においては、ASD 傾向のある児のアタッチメントを必ずしも捉えることができないとする筆者の主張を支持するものであった。

### 3.3 [研究3]

#### 3.3.1 母子相互作用とアタッチメントの質

対象児が母親に対して何らかのアタッチメント行動を示した際、安全の感覚を取り戻して再び探索を始めるまでの時間や様子は、不安喚起要因の対象児にとってのインパクトや、母親との相互作用の内容によって異なる様相を示した。従って、1 回のアタッチメント場面のみから対象児のアタッチメントについて「安定型である」とか「不安定型である」と評価しようとすると、対象児のアタッチメントの本質を見誤る可能性があると考えられた。一時点の行動のみから判断するのではなく、ある程度の時間の流れの中で、複数のアタッチメント場面に

おける親子の様相を捉えることで初めて親子の関係性が見えてきた。また、その中に、ASD の特性ゆえにアタッチメント形成を難しくしていると考えられるいくつかの要因が見出された。

#### 3.3.2 事例検討

[C1 の場合]

観察場面の始めは“安定型の”アタッチメントを示していたが、次第に母親に近接したまま離れなくなり、探索活動に従事することができない時間が長く続くようになった。決して母親に対してアンビバレントな感情をぶつけるわけではないが、過度に母親と近接していることに執着している点においては“アンビバレント型”に分類される行動だったといえるかもしれない。

観察結果からその経過を詳細に分析すると、「C1 が遊び始める」→「母親は C1 から離れようとする」という相互作用のパターンが繰り返し見られた。このパターンが何度か繰り返されるうちに、C1 は母親が自分から離れようとする様子を敏感に察知するようになり、母親が少

表 2 各対象児のアタッチメント行動の具体的エピソード例

	不安喚起前の子どもの行動と背景	不安喚起の契機となった状況	不安喚起時の子どもの行動	子どもの行動に対する母親の行動	子どもの情動の変化
C1	積木が床においてある。自分から積木のところに歩いて向かい、積木の前でしゃがみ、積木を積む。MはCの後ろからついて行き、Cの1メートル程後ろで止まってCの様子を見ている。	保育士が来て、Cに対し積木を挟んで真向に座る。	積木を積むのをやめて立ち上がり、保育士に背を向けてMの方を振り返り、Mのそばまで行きつつ。	「いいよ」と積木を指さして、Cと一緒に積木のところまで行き、Cの横に座る。	Mの横で安心して再び積木を積み始める。
C2	テントに入っただけしばらく遊んでいる。Mはテントの入り口の外側に座って、保育士と話している。	テントの外側から保育士が、「暑くないじゃない?」と、おどけた感じで体を揺らしながらCに話しかける。	テントから出てきてMに抱き着き、Mの洋服の首から胸元に手を入れる。	MはCを抱き頭をなでる。Cはすぐには気持ち切り替わらない。MはCをくすぐったり、スキンシップ遊びをする。	しばらくMとスキンシップ遊びをした後、不意に走り出す。
C3	入室し、部屋の様子を見る。	部屋の様子が以前と違っていることに気づく	Mのすぐ横に行って立ち止まり、その場所から部屋の様子を見回す。	「ちがうね」とCに声をかける。そして、「青い部屋入って見る?」とテントを指さす。	Mが指さしたテントの方を見る。テントの入口から中を覗き込む。
C4	他児が積木を積んで遊んでいる。積木が倒れて「きゃー!」と楽しそうにはしゃぐ声が聞こえ、興味を示してそちらに走っていく。	近くまで行くが遊びの輪に入っていくことができず立ち止まる。Cと一緒に遊びたいことに周囲の大人は気づかない。	そろり後ろを振り返りMの顔とちらっと見る。	Cのそばにきて「いっしょに遊ぼう!」と言って、Cが遊びに近づけるようそっと後押しする。	他児と同じように積木を使って遊び始める。
C5	室内を走って遊んでいる。	他児とぶつかって転んでしまう。近くにいる保育士がそっとCを抱く。	「ママ、ママ」と言って、少し離れたところにいるMのところまで走っていく。	突っつ、軽くポンポンと背中を叩く(もう大丈夫!というように)。	またすぐに走りに行く。

C = Child M = Mother

しでも動こうとすると瞬時に気づいてくっつくようになった。さらに分析を進めると、このパターンは、「C1 が母親にくっついたまま遊ばない」→「母親は新たな遊びを求めて移動する・C1 に新たな遊びを提示する」といったもう 1 つの相互作用パターンにつながっていることが見出された。ウレタン積木を目前にして母親にくっついたまま遊ばない C1 の様子をじれったく感じてしまう母親は、次々に別の遊びを探して何とか C1 を遊ばせようとするのであった。記録を更に詳細に分析すると、C1 は本来、観察場面を通して一貫してウレタン積木を並べて遊びたいという思いがあったことがわかる。母親が別の遊びを求めて移動している際、C1 は時々ウレタン積木を小さく指さしたり、母の腰のあたりを押して“自分が行きたいのはそちらの方向ではない”ということ伝えようとしていた。しかし、母親は C1 のサインが弱く不明瞭なため C1 の気持ちに気づかず、何とか C1 が楽しめる遊びを探そうと躍起になった。「C1 がサインを出す」→「母親はサインに気づかず次の遊びを探す」といった相互作用が繰り返された結果、C1 は母親に自分の願望を伝えることを諦め、母親にくっついたまま遊ぼうとしなくなった。要するに、一定時間の母子の相互作用の分析の結果、両者の間でボタンの掛け違いが生じていることが見て取れた。

### 3.3.3 対象児の特性と養育者の敏感性

一般的に、養育者の敏感性（子どもの気もちや要求に敏感に気づく性質）がアタッチメントの安定性に寄与することが知られている（Ainsworth, 1978）。この一般原則に基づいて C1 の事例を概観すると、母親は C1 が遊び始めたとたんに離れようとする、C1 のサインや願

望をうまく汲み取ることができない、つまり、母親の敏感性が低いために子どもは不安定なアタッチメントパターンを呈していると解釈され得るかもしれない。しかし、観察時間外における母親による語りから、ともすれば敏感性が低いと評価され得る母親の行動は必ずしも母親に元来備わった性質や資質ではない可能性が示唆された（図 1）。母親の行動の背景には、C1 が乳児期からずっと人見知りや場所見知りが激しく対応に苦慮してきたという対象児との相互作用の歴史から形成された観念があることが明らかとなった。

また、現在においては、観察結果にあるように、対象児の発信の弱さや特定の活動に一般的に想定し難い程に固執する傾向のため、通常の子育てに比べて母親が子どもの要求に気づきにくい可能性があると考えられた。

つまり、ASD 傾向のある子どもが乳幼児期に呈する様々な特異的な行動は、元来十分に高い

「2~3 か月ぐらいのときから同じぐらいの子とマンションで会ったりするようになったときに、もう、一人ずっと泣いていて」  
 「『慌てなくていい』って周りの方は言ってくれるんですけど、やっぱり離れてほしいというか遊んでほしいってどうしても思っちゃって。やっぱり焦る気持ちとか、この時間内で遊んでほしいって。(中略) もうそれがずっとなので、そういう気持ち染みついて。 (中略) 絶対できるのに、好きなものになって思うことがすごいあって、でも、なんかやらないと、できるのに勿体ないと思っちゃうのがすごいあって。」

図 1 母親の語り



可能性がある養育者の敏感性 (van Ijzendoorn, M. H. et al., 2007) にネガティブな影響を与え、アタッチメント関係構築の基盤となる母子の相互作用にミスマッチをもたらす場合があることが明らかとなった。

#### 4 総合考察

本研究の結果より、コミュニケーションの発達に課題を抱える子どもの母子関係構築支援においては、専門家等の第三者がそれぞれのペアの相互作用のミスマッチを紐解き、子どもの行動の背景にある本当の気持ちは何なのか、養育者の何気ない行動が子どもにどのような影響を与えているか等に関して養育者に気づきを与え、理解を促す必要があると筆者は考える。また、その際、子どもの不安を喚起する具体的事象をなおざりにすることなく丁寧に捉えるとともに、子どもが本来実現させたいと考えている事が何なのかを想像し、安心してそれに向かうことができるよう、環境を整えていくことが重要であると考えます。

#### 参考文献

- Ainsworth Mary DS・Blehar Mary C.・Waters Everett・Wall Sally. (1978). Patterns of attachment: Assessed in the strange situation and at home. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- American psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 5<sup>th</sup> edition.
- Baker Jason K.・Messinger Daniel S.・Lyons Kara K.・Grantz Caroline J.. (2010). A pilot study of maternal sensitivity in the context of emergent autism. *J. Autism Dev. Disord.*, Springer, 40(8), 988-999.
- Capps Lisa・Sigman Marian・Mundy Peter. (1994). Attachment security in children with autism. *Dev. Psychopathol.*, Cambridge University Press, 6(2), 249-261.
- Rutgers Anna H.・Bakermans-Kranenburg Marian J.・Ijzendoorn Marinus H.・Berckelaer-Onnes Ina A.. (2004). Autism and attachment: a meta-analytic review. *Journal of Child psychology and Psychiatry*, Wiley Online Library, 45(6), 1123-1134.
- Van IJzendoorn Marinus H.・Rutgers Anna H.・Bakermans-Kranenburg Marian J.・Swinkels Sophie HN・Van Daalen Emma・Dietz Claudine・Naber Fabienne・Buitelaar Jan K.・Van Engeland Herman. (2007). Parental sensitivity and attachment in children with autism spectrum disorder: Comparison with children with mental retardation, with language delays, and with typical development. *Child Dev.*, Wiley Online Library, 78(2), 597-608.
- Willemsen-Swinkels Sophie HN・Bakermans-Kranenburg Marian J.・Buitelaar Jan K.・Van IJzendoorn Marinus H.・van Engeland Herman. (2000). Insecure and disorganised attachment in children with a pervasive developmental disorder: Relationship with social interaction and heart rate. *The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, Cambridge University Press, 41(6), 759-767.
- Wing, L. (1997) The autistic spectrum: A guide for parents and professionals. London: Constable. (ウィング, L. 久保紘章・佐々木正美・清水康夫 (監訳) (1998) 自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック 東京書籍)

伊藤英夫 (2002). 「自閉症児のアタッチメントの発達過程. 児童青年精神医学とその近接領域」, 一社日本児童青年精神医学会, 43 (1), 1-18 頁.

遠藤利彦(編) (2021). 「入門アタッチメント理論 臨床・実践への架け橋」, 日本評論社.

小林隆児・小林広美・船場久仁美・井上玲子・北野庸子・仲間友子・山本奈津子・石田望・板垣里美 (2002). 「育てにくい幼児に対する早期介入について」, 『東海大学健康科学部紀要』, 8, 81-88 頁.

坂口美幸・別府哲 (2007). 「就学前の自閉症児をもつ母親のストレスの構造」, 『特殊教育学研究』, 45(3), 127-136 頁.

千住淳 (2012). 「社会脳の発達」, 東京大学出版会.

西村智恵子・高野久美子 (2020). 「乳幼児期自閉症スペクトラム児の母親における困難への対処に伴なう体験のプロセス」, 『創価大学教育学論集』, 72, 163-177 頁.

山本淳一・楠本千枝子 (2007). 「自閉症スペクトラム障害の発達と支援」, 『認知科学』, 14, 621-639 頁.